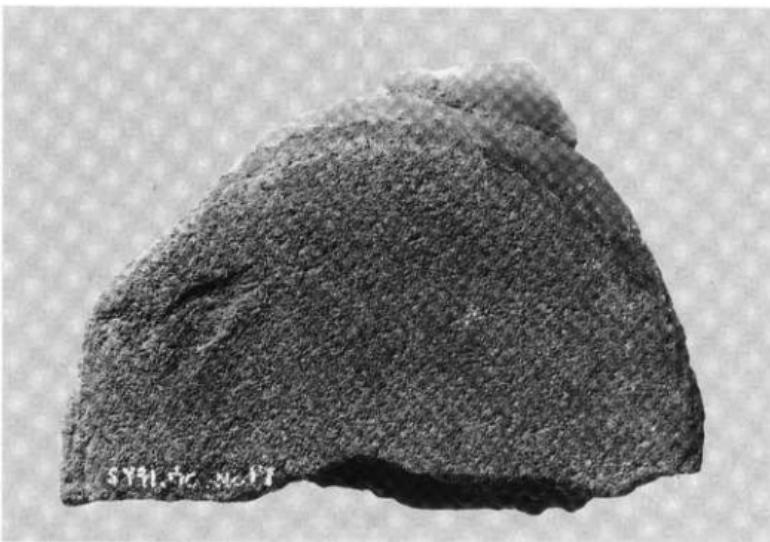
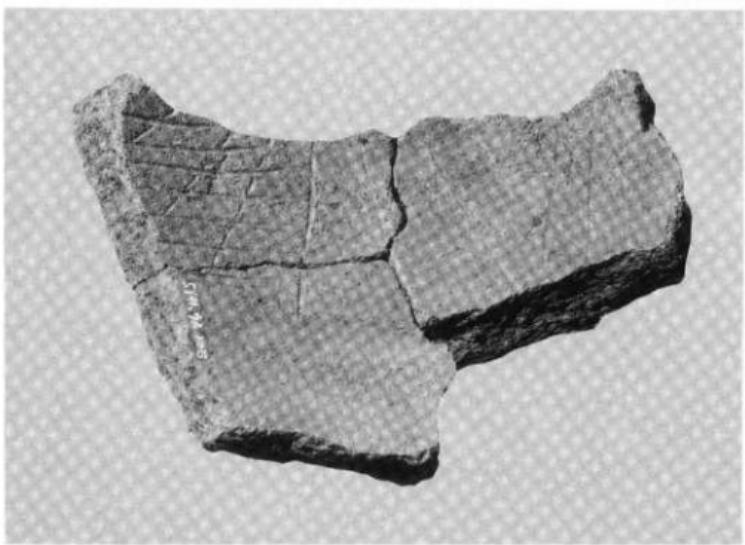


中世土器(土鍋, 内面)



中世土器(土鍋, 底面)



中世土器(鉢)



鉢陰刻文様細部

付 編

——真田町大字本原字殿藏院採集資料について——

(1) 採集地点及び原因

資料採集地点は、真田氏館跡の西方約300mの、大字本原字殿藏院に所在し、大沢川によって形成された扇状地面上に位置する。現在は、水田及び畑地に利用されている。館跡調査中の平成3年4月28日に、当該地域において、縄文土器7点を採集した。並びに、重機によって掘削されていた穴(径約10m、深さ約5m)の壁面を観察したところ、地表面下約1mに住居跡のカマドの露出を発見した。カマドは既に破壊されていたが、付近より上師器4点、須恵器4点が採集された。

以下、これら遺物について概要を示す。

(2) 採集遺物

縄文土器 (第1図1~5)

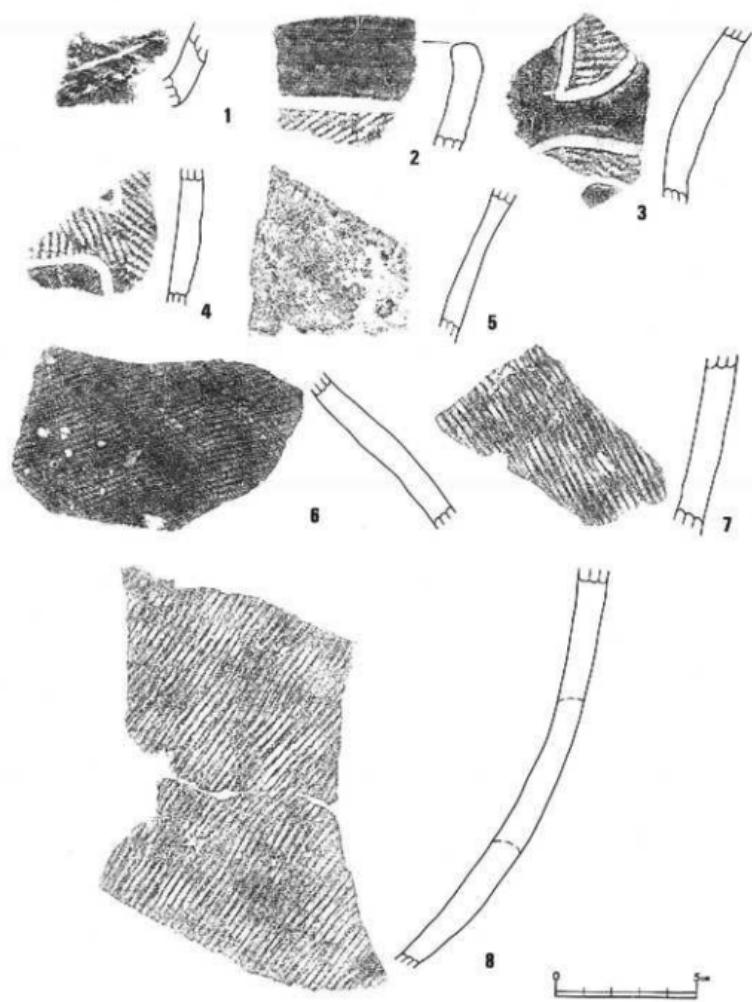
採集された縄文土器は、7点であったが、2点は、小破片のため、実測は不可能であった。1は、口縁部破片と思われる。内面は入念な横方向の調整痕を残す。纏維を多量に含む「軽少」な胎土である。色調は、赤褐色を呈する。前期前半に属するものと考えられる。焼成は良好。2は、口縁部片である。原体LRの縄文を施す。縄文施文後、棒状工具によって太い沈線を横走させている。また、口唇端をヘラで平らに調整し、口縁部に1.5cm程の無文部を有する。色調は、茶褐色を呈し、胎土は、石英、細い金雲母など砂粒を多量に含む。焼成は良好である。称名寺1式併行期に属するものと看られ、以下5まで同時期と思われる。3は、2と同一個体と考えられる胴部扇曲部破片である。文様は、J字文の先端と思われる。4も胴部破片である。原体RLの縄文を施す。内、外側とも、調整痕を残すが、内面に比べ、外側はやや粗雑である。胎土は、石英を少量含み、黒雲母など砂粒を多量に含む。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。5は、無文の胴部破片である。2・3・4と同時期のものと考えられる。胎土は、金、黒雲母、石英等、砂粒を多量に含む。色調は、茶褐色を呈し、焼成は良好である。

土師器 (第3図2, 4, 5)

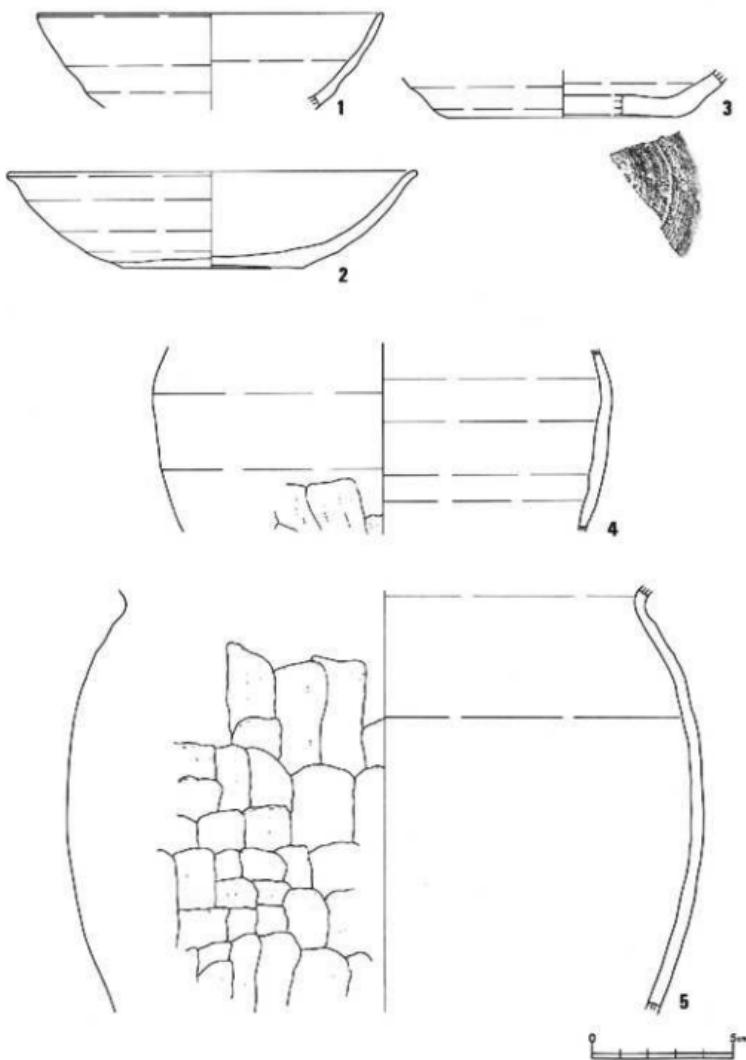
須恵器とともに、いずれも住居跡カマド付近より採集された。2は壊である。復元口径は14.7cm、器高は3.4cmを計る。内面は黒色処理されている。成形は、ロクロ成形であり、体部末縁は、ロクロ成形のちヘラケズリを施す。底部は、回転糸切り。内面はヘラミガキを施す。



第1図 遺物採集地点位置図
1. 遺物採集地点 2. 真田館跡遺跡 3. 四日市遺跡



第2図 採集遺物(1)



第3図 採集遺物(2)

胎土は、赤色、白色粒子を多量に含む。色調は外面は赤褐色を呈す。焼成は良好。4・5は、いずれも壺である。4は、成形はロクロナデである。その後に、下部は下方向からのヘラケズリを施す。内面の一部に炭化物が、外面の下端にはススが付着する。胎土は、赤色、白色粒子、雲母を多量に含む。色調は褐色を呈す。焼成は良好。11は、口縁部を残存するが、口唇部を欠損する。内径は、最大21.8cmを計る。頭部以上は、表面には、横ナデを施し、それ以下は上方に向からのヘラケズリを施す。内面は、頭部以上には横ナデを施し、以下は横ナデののち、左上りのナデを加えている。胎土は、白色粒子及び雲母を含む。色調は褐色を呈す。焼成は良好。土師器はいずれも9世紀の所産と考えられる。

須恵器（第2図6~8、第3図1,3）

土師器とともに、いずれも住居跡カマド付近より採集された。12・13は壺である。12の成形は、輪積み成形であり、外面はタタキ目を残し、内面には、平行する条線（輪積み痕）が残る。胎土は、白色粒子及び雲母を多量に含む。色調は灰黒色を呈す。焼成は良好。13の成形は、輪積み成形であり、外面にはタタキ目が残されている。また、外面には自然釉がかかっている。胎土は、白色粒子及び雲母を多く含む。色調は灰黒色を呈す。焼成は良好。14・15は壺である。14は、成形はロクロナデ。底部は回転糸切り。胎土は、白色粒子を多く含む。色調は灰色を呈す。焼成は良好である。15は復元口径12.4cmを計る。成形は、ロクロナデによる。胎土は白色粒子を多く含む。色調は灰色を呈す。焼成は良好。須恵器も、9世紀に属するものと考えられる。

（3）まとめ

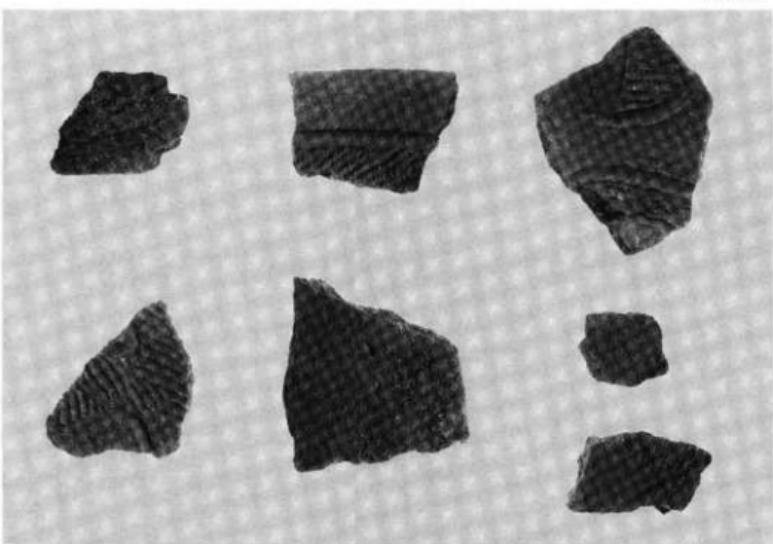
以上の資料が採集されたことから、当該地域においても縄文時代及び平安時代の遺跡が存在することが確認できた。縄文時代については、今回の採集地点を含めて真田町一円で中期末葉～後期の資料が最も多く採集されている。また平安時代については、住居跡の存在が窺えたことからも、当該地域周辺に集落遺跡が存在すると推測できる。近在する同時代の遺跡としては四日市遺跡があげられる。四日市遺跡は、遺構、遺物の様相から10世紀代と考えられており、この資料を鑑みれば今回の採集遺物は、土師器壺の口縁部分がよりきつく外反する点などを以って、若干古く9世紀代のものとも考えられよう。現在においては四日市遺跡を除いて古代の様相を知り得る資料がないことからも、今回の資料の採集は極めて重要な意味をもつものといえよう。

（塙田泰司）

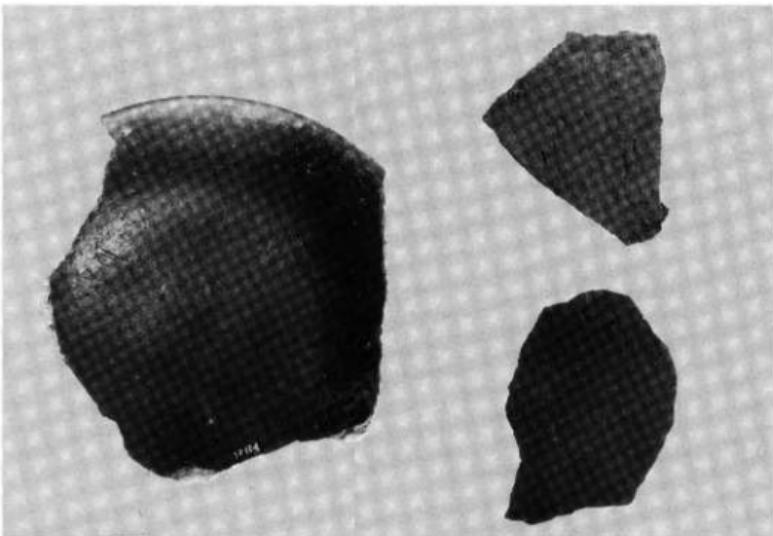
参考文献

真田町教育委員会『四日市遺跡』 1990-3

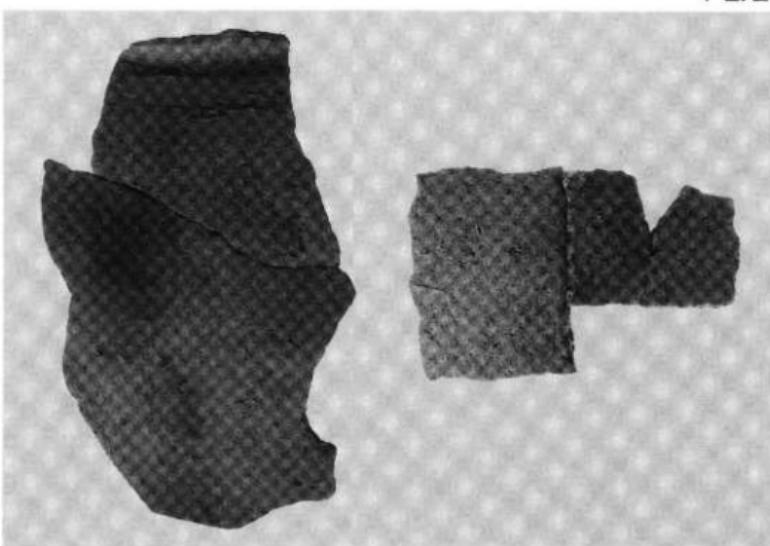
PLATE



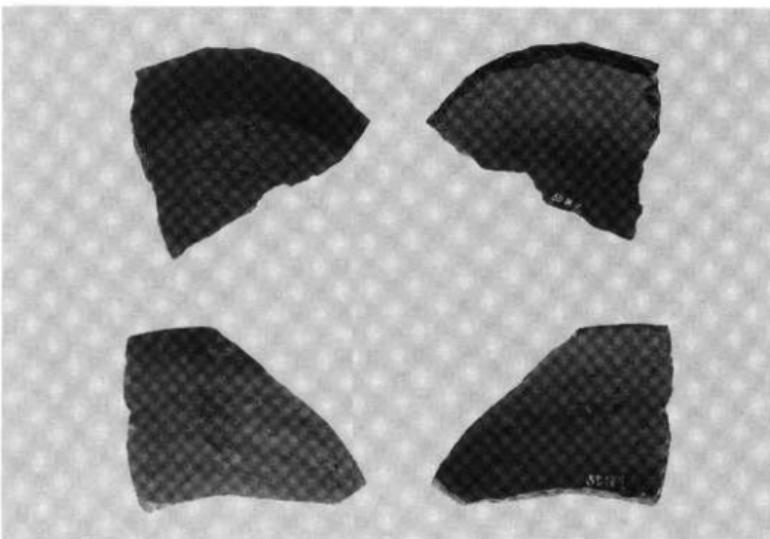
綱文土器



土師器(坏・甕)



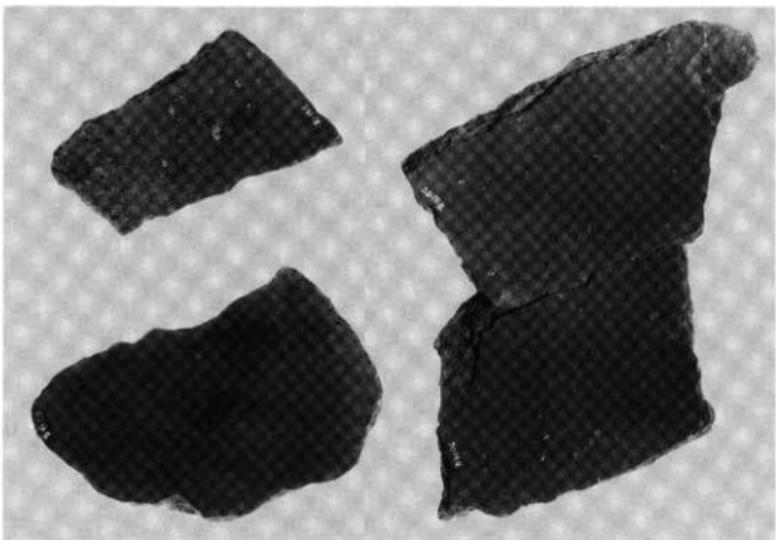
土篩器(甌)



須惠器(甌)



須恵器(甕一裏)



須恵器(甕一裏)

真田氏館跡

発行日 平成4年3月30日

発行 長野県小県郡真田町教育委員会

編集 青木 豊・内川隆志・河合 修

印刷 株岡田企画